

《第6号》

公益大ニュース

2021. 夏

東北公益文科大学広報誌

月が地球に接近して最も大きく見える「スーパームーン」と皆既月食が重なった5月26日、公益大では皆既月食を観察する公開講座が開催されました。観察の様子はオンラインでも同時中継。木々の間から月食を確認すると、学生、市民は歓声をあげ、キャンパスを照らす赤銅色の光に見入っていました。



公益大へようこそー新任教員あいさつ

- 02_新名 阿津子 准教授
(観光・まちづくりコース)
ノヴァコフスキ・カロール・ピオトル 講師
(メディア情報コース)
- 03_学長メッセージ/卒業式/入学式

教育・研究活動

- 04_令和2年度ベストティーチャー
(樋口 恵佳 准教授)
- 05_大学院 (公益学研究科)
- 06_教員著作 (玉井 雅隆 准教授)
- 07_教員研究 (鎌田 剛 准教授)

学生活動

- 08_学生の表彰
女子バレー部
- 09_ピアサポート委員会
L.E.E (英語部)

地域連携

- 10_海ごみ問題解決の取り組み
English Café
- 11_スーパームーンの皆既月食観察会
- 12_Topic! & 編集後記

ようこそ東北公益文科大学へ 新しく着任された先生方をご紹介します

現在本学は、専任教員40名（特任教員含む）で、教育研究活動を行っています。今回は、令和3年4月に着任された2名の先生からごあいさつをいただきました。

新名 阿津子 准教授（観光・まちづくりコース）

専門：人文地理学・ジオパーク研究



2021年4月に着任した新名阿津子（にいなあつこ）です。この新名姓は南九州の名字ですが、私自身は南国土佐の高知出身です。本学ではプロジェクト型応用演習「鳥海山・飛鳥ジオパーク×サステイナブルツーリズム」を開講しています。

専門は人文地理学で、2009年からジオパーク研究をしています。ジオパークはユネスコの最も新しいプログラムで、地球46億年の歴史の中で繰り返されてきた地球と生命の記憶を守り、学び、祝福し、これからの未来にむけて持続可能な地域社会を作ることミッションとしています。大学院まで都市研究をしていた私ですが、ジオパークに出会い、このプログラムの革新性、多様性、これ以上ない時空間スケール、人々の情熱や素晴らしさに魅了され、研究テーマを変更しました。今では理論と実践の両面からジオパークにアプローチしています。特に、持続可能な観光やレスポンスブルツーリズム（責任ある観光）に着目しており、山陰海岸のお掃除カヌーやアプアネアルプス（イタリア）の鉱山跡地における廃石回収バスケットの設置事業など、観光による環境保全についての研究を進めています。

2015年からは日本ジオパークやユネスコの現地審査員として審査業務にも携わっています。現地審査では、そのジオパークの活動をジオパークの基準に照らし合わせて検証することで、そのジオパークの長所や短所を明らかにした上でこれからの活動をどのように発展させていくのかについて議論します。2016年には鳥海山・飛鳥ジオパークの認定審査に審査員として参加し、丸池様（遊佐町）や象潟九十九島（にかほ市）では保全について議論しました。そして、今春からは鳥海山・飛鳥ジオパークの一員としてユネスコ加盟を目指し、一緒に活動することとなりました。大学ではフィールドワークを通じて地域から学び、これからの社会のあり方、地球の未来を共に考えたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。

ノヴァコフスキ・カロール・ピオトル講師（メディア情報コース）

専門：自然言語処理、計算言語学



私は、2021年4月1日付で本学メディア情報コースに着任いたしました。専門分野は自然言語処理と計算機言語学です。本学では、基礎プログラミングや情報リテラシーなどを担当しております。

出身国は東欧のポーランドです。初対面の日本人によく「ポーランド語ってありますか？」と聞かれたりします。答えは、ありますよ。ただし、ポーランドの人口はさほど大きくないし、ポーランド語が話されているのもほとんどポーランド国内だけです。海外ではあまり知られていないのです。ひょっとしたらポーランドという国名すらピンと来ない人も少なくないと思います。

私にはそういう背景があって、日本学科に進学した時からなんとなく少数民族や少数言語に関心を寄せるようになりました。修士課程ではトカラ列島という、九州と奄美群島の間にある薩南諸島に属する島嶼群を研究していました。博士課程では北海道に移って、日本列島の北部に居住するアイヌ民族の言語、消滅の危機にあるアイヌ語を、コンピューターと人工知能を使って分析する研究に携わってきました。

日本は「同質的な国」や「単一民族国家」だと思われがちですが、日本でも数多くのマイノリティが存在し活躍して、さまざまな少数言語や方言が話されていることはとても魅力的だと思っています。その多様性を学生の皆さんにも知ってもらえるようにしたいと考えています。

これからは少しずつ山形県や庄内地方に関わる新しい研究テーマを探しながら本学での教育・研究活動に取り組んでいきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

学長メッセージ ～学修者中心の大学を目指して～

学長 神田 直弥



本学は学修者中心の大学として、教育改革に取り組んできました。全国の大学に先駆けて4学期制を導入し、授業時間を90分から105分に変更しました。これにより、グループワークやディスカッション等を通して主体的に学ぶアクティブラーニングが推進され、海外留学やインターンシップにも参加しやすくなりました。

新型コロナウイルスの影響により、現在、海外留学や職場体験型のインターンシップは難しい状況にあります。しかし、昨年度の前半に実施をしたオンライン授業のノウハウを活かし、協定締結校とオンラインで接続した語学研修や、オンラインを活用した課題挑戦型インターンシップを実施しています。後者は地元の自治体や企業等から出されたテーマに対し、少人数のチームで解決策を検討するものです。昨年度と今年度の春学期で、367名の学生が51のテーマに挑戦しています。短期間に多くのテーマをいただいたことは、本学と地元地域の結びつきの強さを表しています。

現在は学内での感染対策を徹底し、対面授業を実施しています。今後も地域とのつながりを大切にし、オンライン授業も効果的に活用しながら、教育の質の向上に引き続き取り組みます。

ご卒業・ご入学おめでとうございます

卒業式

令和3年3月21日（日）、東北公益文科大学卒業式・大学院修了式を本学公益ホールで挙行し、公益学部196名と大学院公益学研究科（修士課程）10名の計206名が学び舎を後に新たな一歩を踏み出しました。

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、卒業生・修了生と教職員のみの開催となりましたが、欠席された卒業生・修了生およびご家族向けに式典の様子がライブ配信されました。

式典では、卒業生、修了生一人ひとりの名前が読み上げられ、卒業生代表として公益学部総代の金子要さん、修了生代表として大学院総代の高橋辰之さんに学長から学位記が授与されました。また成績優秀者2名（総代含む）に成績優秀賞、地域の連携・交流活動やバイオニア的精神を持ち先導的な活動に積極的に取り組んだ3名に「理事長賞」「学長賞」「後援会長賞」が授与されました。



入学式

令和3年4月12日（月）、麗らかな春の日差しのもと東北公益文科大学・大学院入学式を本学公益ホールで挙行しました。この日新たな学びのスタートラインに立った入学生は公益学部241名、大学院公益学研究科修士課程4名、大学院公益学研究科博士課程1名の計246名。新入生および教職員のみの開催となりましたが、その模様はライブ配信され、多くのご家族が式典を見守りました。

式典では入学生一人ひとりの名前が読み上げられ、学部入学生を代表して佐藤真純さんが「大学4年間で、魅力ある地域づくりの手法や政策について学びを深めたい。在学中には海外留学にも挑戦し、広い世界を実際に見ることで、語学力はもちろん、多角的な視野を身に着けたい」と決意を述べました。

神田直弥学長は、式辞で「大学は自由な発想で思索し、自立した生き方を考える無限の可能性のある4年間である。各種奨学制度・就職支援体制・課外活動への支援体制を整えている本学で達成感・充実感のある学生時代を過ごしてほしい」と入学生にエールを送りました。



令和2年度ベストティーチャー賞 受賞者が決定しました

本学では、教育実践に顕著な成果を上げた教員を「ベストティーチャー」として表彰する制度を設けています。令和2年度は学生アンケートを元に、学生の「成長実感」指数が最も高かった教員が選出されました。受賞された樋口恵佳准教授よりコメントをいただきましたので、ご紹介します。

樋口 恵佳 准教授 (政策コース)

この度はベストティーチャー賞をいただくことができ、その理由が学生の皆さんが成長を実感されたということで、大変光栄に存じます。

特に昨年はオンライン授業からのスタートでした。このため、今回の受賞の背後には、授業実施にあたり様々にサポート頂いた職員の方、密に情報共有をして授業改善にご尽力いただいた先生方がいらっしゃるのだと実感しております。心より御礼申し上げます。

授業の工夫としては、昨年のベストティーチャー賞の受賞者であるフェック先生より効果的なアクティブラーニングを実施するにはロールプレイが有効であるというお話を聞いておりました。そこで、授業中に行う演習問題にロールプレイの要素を取り入れてみました。例えば、「あなたはA国の代理人です。A国に代わってB国への反論を考えましょう」などという問題を作るよう意識しました。

また、100名を超える受講者が同時に演習問題を行うという形式を実現できたのは、本学の情報コース教員である広瀬先生が開発された学内ICTツール：s4 (エスフォー) や、オンライン授業の導入に伴って利用がはじまったTeamsなどのサービスのお陰です。特にs4は、学生は自分の端末から回答を書きこみ、教員がそれをリアルタイムで確認し、授業中にレビューすることもできる、大変魅力的なツールです。興味のある方は、ぜひ広瀬先生のご論文をご覧ください。

これからも、より魅力的で学生のためになる授業を展開できるよう、さらに改善を続けていきたいと思えます。改めまして、この度は誠にありがとうございました。



令和2年度「ベストティーチャー賞」表彰式

第12回国際法_演習_星のトマト紛争 (teams-国際法(2021fy_2213)_樋口)

2021年6月1日の授業内演習です。当日23:59を目途に提出しましょう。

恵佳さん、このフォームを送信すると、所有者にあなたの名前とメールアドレスが表示されます。

* 必須

1. デデデ国とププブランドは、いずれもWTOに加盟する国家である。ププブランドは国内でも毎年150t程度のマキシムトマトを生産しているが、毎年、農業国であるデデデ国より10t程度のマキシムトマトを輸入していた。
 2. ただし2020年、デデデ国では1990年代から進めていた研究成果がようやく実り、トマト栽培革命が生じた。とても甘くて美味しく、病気に強いトマト(以下、「デデデトマト」)が大量に生産できるようになったため、従来のトマトの1/2の値段でかつ糖度が2倍のトマトが提供できるようになった。
 3. ププブランド国内の輸入業者もこのデデデトマトに目を付けており、輸入業者の試算によれば、2021年はデデデトマトを100t程度輸入することになるとの見込みであった。
 4. 一連の流れを見たププブランド輸入省では、ププブランド国内のトマト生産者の保護のため、GATT19条のセーフガード措置であるとして、デデデトマトの輸入を従来の10t程度まで数量制限する緊急措置を講じた。
 5. これを受けたデデデ国では、「ププブランドの同措置はGATT19条には該当せず、数量制限禁止を定めたGATT11条に対する違反を構成する」として、ププブランドの輸入制限措置撤回を求めてWTOパネルに提訴した。
- ☆あなたはWTOパネルの審査委員です。WTO法(GATT条文)に照らして、当該デデデ国およびププブランドの貿易紛争を審査し、報告書に書く意見をまとめましょう。*
- (10点)

Teamsを活用した「国際法」の演習

第2回国際法_演習(2)_国際組織の権限の範囲

グループ 国際法(2021fy_S1_コード2213)での話題【凍結】

編集 2021-04-19 12:32:20 クイズ 提出状況(ファイル取得[監査済]責査済) 主産へ 送別

あなたは様々な事情により、WHOのテドロス事務局長に転生しました。
世界保健機関(WHO)の設立条約である世界保健機関憲章にある「任務」(第2条)の(a)~(c)を読み、以下①②の各国からの要求について、WHOが国際法上できる(権限を有している)かできないかを判断し、その理由を説明しましょう。

①加盟国間でワクチン供給量に違いがありすぎるので、COVID-19に伴うワクチン供給を調整してほしい
②隣国内戦状態にあつてCOVID-19対策に集中できないので、紛争を仲介してほしい

本学独自のICTツール(s4)を活用した「国際法」の演習問題

【大学院】教員の研究・授業の様子をご紹介します

研究成果を職場に持ち帰って、実践の場で活用を
入札契約やPPP(公民連携)、公共施設マネジメント

斉藤 徹史 准教授

私は、行政法学・財政法学を専門とし、なかでも入札契約やPPP(公民連携)、公共施設マネジメントに対して行政法の観点から研究を行っています。これらは、今日の行政課題として極めて重要であり、全国的に自治体実務の関心が高いテーマでもあります。すでに数名の自治体からの派遣職員を受け入れていますが、私としては大学院生に対し、①本学大学院での研究成果を職場に持ち帰って、実践の場で活用してもらいたい、②本学大学院に在籍したことの果実を、各自の公務員キャリアの中に残してほしいとの考えのもと、指導に取り組んでいます。そのため、院生には、学外の学会や研究会で研究成果を積極的に発表することを求めています。こうした経験を積むなかで、一つの領域において、派遣元自治体にとどまらず、全国で通用するような真に実力のある公務員となることを願っています。実際、これまでに指導した院生は、修了後に大きく羽ばたき、派遣元自治体の将来を担う人材となりました。演習では、行政法理論と行政実務をつなぎ、院生が関心をもちやすい内容となるように心がけています。他方、院生から行政実務の詳細を教えてもらうことが多々あり、私にとっても大きな学びの機会です。



私自身の大学院時代を振り返ると、指導教員から、研究においては、制度や法律が「なぜそうなっているのか」と疑問をもつことの重要性、すなわち、常に「なぜか」と考え続ける必要性を教えていただいたことが思い出されます。自治体での一般的な研修が、技術やスキルを身につけて執務能力を直ちに向上させるものであるとするならば、大学院での学びは、制度や社会現象そのものに対し、より深く、本質に迫ることで、その解決方法を考察するものです。多くの自治体職員が、本学大学院で「考える」経験を通して、それぞれの仕事で活躍してほしいと思います。

多様な人たちとの対話を進める方法論科目 「共創の技法」

武田 真理子 教授

今、庄内をはじめとする全国の地域社会では、様々な課題解決に取り組むために、より多くの人との対話と協働・共創が求められています。本大学院では、地域・社会の課題の解明やその解決に向けた学修と研究に取り組む院生及び公開講座受講生を対象に、方法論科目の一つとして、多様なメンバー間の対話を進めることができるファシリテーションについて学修する「共創の技法」を開講しています。

本科目は、日本ファシリテーション協会・フェローとして第一線でご活躍の加留部貴行先生を講師に招き、ファシリテーションの理論と技法を講義・演習により学んだ上で、地域課題の解決にむけたワークショップの企画・立案、準備・運営、評価(ふりかえり)の一連の過程を実際に体験することを通して、実践的な知識とスキルを習得することを到達目標としています。

2016年度より5年目の開講となり、毎年、行政職員、地域おこし協力隊員、市議会議員、会社員、NPO職員、社協職員、医療関係者、コミセン職員などの多様な属性の30名前後の受講生が学び合いを深めています。後継科目の「合意形成・コーディネーション論」ではさらに、多様なメンバーによる連携や協働による課題解決の実践を仕掛けることのできるコーディネーションの力を身に付けるための学びのプログラムを用意しており、様々な地域課題解決や共創の「現場」における修了生同士の連携や協働も実現しています。「共創の技法」は原則、4月から8月までの土曜日(5日間)に期日指定科目として開講しています。学外の方にも公開をしている科目ですので、是非、様々な地域づくり、課題解決に向けたスキルアップにご活用下さい。



欧州安全保障協力機構（OSCE）の多角的分析 — 「ウィーンの東」と「ウィーンの西」の相克— を執筆して

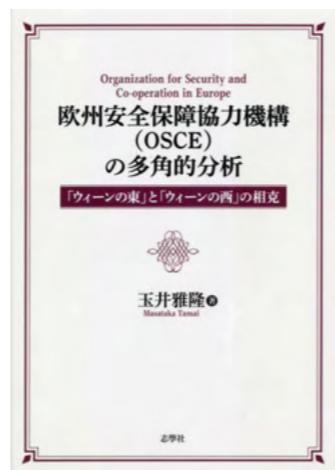
玉井 雅隆 准教授（国際教養コース）

2021年3月に教員著作「欧州安全保障協力機構（OSCE）の多角的分析 —「ウィーンの東」と「ウィーンの西」の相克—」が志学社より出版されました。著者である玉井雅隆准教授より、著作についてコメントをご紹介します。

欧州安全保障協力機構（OSCE）はアメリカ、カナダ、全欧州、旧ソ連諸国及びモンゴルの57カ国が加盟し、日本など17カ国がオブザーバーとして参加する、世界最大級の地域的国際機構である。もともとは冷戦期の東西両陣営の対話メカニズムから始まったものであるが、1995年に常設の国際機構となったものである。活動領域は人権尊重、民主主義、法の支配の順守を参加国に求めるものであり、それらの規範構築から国際平和を構築することを目的に活動を行っている。しかしながらロシアなど一部諸国（「ウィーンの東」諸国）が近年、先に言及した民主主義規範に関して西側（「ウィーンの西」諸国）からの「価値観の押し付け」として、反発をするようになってきている。これが、「ウィーンの東」（East of Vienna）問題である。

ロシアやいくつかのCIS諸国は、そのようにOSCEを批判する。しかし、ロシアはそのような態度をとりつつも、なぜOSCEに加盟し続けるのか、そしてOSCEの諸活動を受け入れているのか、という点に関して既存の研究では明らかではなかった。本書では、その「ウィーンの東」問題と「ウィーンの東」諸国の外交姿勢に関して、OSCEの諸メカニズムから多角的な分析を行ったものである。筆者は既に2014年にOSCEの少数民族高等弁務官に関して研究した『CSCE少数民族高等弁務官と平和創造』を著した。当該研究ではCSCE・OSCEでもマイノリティ問題に焦点を当て、少数民族高等弁務官の成立過程を研究したものである。本書はそれに続く二冊目として、前著の出版前後から研究を重ねてきたものをまとめたものである。

この単著は、私一人の力でまとめ上げられたものではない。OSCEプラハ事務所でお世話になったアーキビストやOSCEの友人の協力がなければ執筆できなかった。さらに、国際教養コースの同僚、当時の学長、学部長や戦略推進室長などの励ましや支えがなければ刊行には至らなかったであろう。誌上ではあるが、お礼を申し上げたいと思う。



『欧州安全保障協力機構の多角的分析』

【教員研究紹介】 地域の医療・介護、福祉の仕組みをどう創るのか

鎌田 剛 准教授（地域福祉コース）

本学の鎌田剛准教授は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）（2021-2023年）「ヘルスケア領域における次世代連携モデルの探索—医療連携・多職種連携から社会連携へ」の採択を受けるなど、積極的な地域福祉研究を実施しています。今回は鎌田剛准教授に、地域の医療・介護、福祉の仕組みをどう作るのかについて、研究内容をご紹介します。



皆さんは、“神の手を持つお医者さんがたった1人いる地域”と、“見守ってくれる一般住民がたくさんいる地域”のどちらで暮らしたいですか？ 私の研究フィールドである香川県のまんのう町は後者です。こちらでは、歯科医師・歯科衛生士などの医療者と、弁当屋、民生委員、スーパーマーケット関係者などの“非医療者”がタッグを組んで、高齢者の食支援を進めています。



お弁当屋さんは、仕事から配達時に高齢者の異変に気づくことが多く、民生委員さんには要支援者の情報が人づてで入ってきます。こうして非医療者による協力が得られたことで、当地では、配食による食事提供と見守り、通院送迎、スーパーへの買物ツアーなどが実現しています。歯科医師は、「医療職だけではカバーできない暮らしの課題が多いので、地域の人たちと一緒に活動しています」と笑顔で教えてくれました。私は、このような“地域社会×ヘルスケア”の掛け合わせが、次代の暮らしを支える安全・安心のモデルになると考えています。

地域医療の世界では、医療機関同士の“医療連携”、在宅療養を支える“多職種連携”という用語がかねて使われてきました。しかし、まんのうの事例のような“お弁当屋さんとの連携”を説明する概念はなく、その過程や要件もナゾのままです。そこで私は、医療現場における異分野・異業種との協働の過程を「社会連携」と名づけ、近年の研究テーマにしています。

これまでの調査を通じ、まんのうの他にも、新聞社×医療者、料理人×医療者といった興味深い取り組みの存在が明らかになってきました。そこで今回の科研費採択を機に各地の事例にあたり、社会連携の理論的モデルと実務的な提言を整理したいと考えています。皆さんの周りにも、おもしろそうな事例があればぜひ教えてください。調査におじゃまいたします！

学生たちの表彰、クラブ・サークル等の活動の様子をご紹介します。

高齢女性を保護した本学学生が 酒田警察署から感謝状をいただきました

道に迷っていた高齢女性を保護した硬式野球部の3人（3年 広川俊也さん、2年 坂井汰我さん、2年 高橋尚也さん）に酒田警察署長から感謝状が贈られました。

硬式野球部の練習の後、汗を流しに温泉へ行き、運動部寮に戻ろうと車を走らせていた3人は、途中、暗がりガードレールにつかまっている高齢女性を見つけました。普段は人がいないような場所に一人いる女性を心配し車を停めて声をかけたところ、女性が道に迷っていることがわかりました。そこで3人は、酒田警察署に女性を送り届けました。



5月27日（木）に酒田警察署で行われた感謝状贈呈式では、塚本憲明酒田警察署長から3人へ直接感謝状が手渡されました。塚本署長からは、「夜間だったので、（女性を）そのままにしていたら、事故に巻き込まれたかもしれません、女性に声をかけた3人の判断・行動はとても立派だった。3人の行動に心から感謝したい」との言葉が贈られました。表彰状を授与された3人は、「女性が怪我することもなく本当に良かった。今回、このような感謝状をいただけたことはとても嬉しく、これからも困っている人をみたら積極的に声をかけていきたい」と話しました。

「熱意・活気・徹底」をスローガンに！ 東北優勝、全国上位を目指して ～女子バレーボール部～

東北公益文科大学の強化指定部である女子バレーボール部は、創部7年目のまだまだ若いチームですが、「東北1部リーグ優勝、東日本インカレベスト8、全日本インカレベスト16」を目標に日々練習に励んでいます。現在は4年生2名、3年生9名、2年生5名、1年生5名の21名で活動しています。

普段の練習は週4日（長期休み期間は週5日）。他のライバル大学と比べて圧倒的に練習時間が短い分、全体練習を効率よくかつ集中して取り組んでいます。また空きコマや全体練習後などの時間を有効活用し、個のスキルアップを図っています。練習計画や内容については各学年の代表者と監督が話し合っています。監督が決めたメニューや指示どおりに取り組む「トップダウン型」ではなく、どういうチームを作りたいか、

必要なスキルは何か、そのために取り組むべき練習は何かを考え提案する「ボトムアップ型」を取り入れています。自分たちで決めたメニューなので、目的意識が明確になるとともに、責任感をより強く持つようになりました。

卒業生には、国内最高峰のVリーグのチームに入団して頑張っている先輩や、公務員、一般企業に就職し、バレーボールを教えている先輩など、卒業後も各方面で活躍しています。本年度のチームのカラーは「サブから始まるトータルディフェンス」です。持ち前の明るさと元気の良さ、粘り強さを前面に出し勝てるチームを目指しています。応援よろしくお祈りします。



学生同士が助け合う相談窓口づくり ～ピアサポート委員会～

ピアサポート委員会 委員長 新藤 瞭さん（3年生）

私たちピア・サポート委員会は、公益大生が学生生活などについてお互いに相談でき、授業や進路についての意見を交換できる、学生同士の交流の場所をつくることを目的に活動しています。現在は委員会スタッフが相談や意見を聞き、サポートできる内容のものは対応を行い、対応が難しいと判断した内容については学生と事務局や学生相談室、教員との間にコネクションを作るといった形で活動を行っています。

また、様々な状況を鑑みながらではありますが、飲み物やお菓子を準備して、より皆さんが居心地の良い場所を作っていきます。これといった相談がなくても時間つぶしのお喋りに立ち寄りてもらって構いません。時間が空いていて誰かと話したい、それだけで来ていただく理由として十分です。学年問わずに利用していただきたいと思っています。

学生の皆さんの利用をスタッフ一同お待ちしております。

先輩と気軽に話してみませんか？

学生生活における様々な疑問・悩み（例：VPN接続、コース選択、時間割作成について等）を解消するべく、ピア・サポート委員会に所属する学生が1日中常駐しています。ぜひ友達と一緒に気軽に乗り越えてください。お待ちしております！

時間割作成の相談がしたい！

VPN接続について聞きたい

コース選択の相談がしたい

何となく先輩と話してみたい

※メールでの対応も可能です
gakuzikai@outlook.jp

Let's Enjoy English at the L.E.E. club! 楽しみながら語学力アップ！ ～英語部～

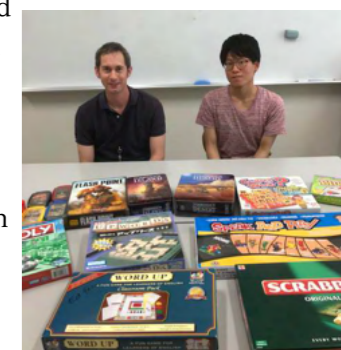
L.E.E 顧問 エドモンド・フェック 講師（国際教養コース）

The L.E.E. (Let's Enjoy English) club is an English conversation club at Koeki University. Students meet every week at lunchtime on Wednesdays to talk in English with each other and with some of the English teachers, such as Professor Matsuta, Professor Bunting and me (Edmund Fec). There is usually no set topic and students are free to talk about whatever they want.

The conversations are facilitated by the club leader, Keita Shirahata, a 3rd year student on the International Liberal Arts Course. The meetings are currently held in the L.E.E. club room which houses a collection of English DVDs, board games and reference books (including study aids for TOEIC), all of which are available for club members to use at any time.

In 2020, club activities were restricted due to COVID-19, but this year the meetings have resumed in person and recently we have started a games afternoon for members to enjoy card games or board games in English. We also have two LINE groups – one in Japanese for club information and another one for sending messages in English. If any Koeki students are interested in joining us for a chat or a game, we would love to see you! For more information please send an email to: koeki_lee@yahoo.co.jp or come to the club room on Wednesday lunchtime.

【要約】 L.E.Eは、公益大生による英会話クラブです。毎週水曜日の昼休みに活動しています。英語用DVDやボードゲーム、TOEIC参考書など豊富に揃えています。昨年度はコロナで活動が制限されましたが、再開しました！



日本語訳はこちら！↑

【地域共創センター】

海と川のつながりから「ごみ問題」を考え、行動しよう！
庄内の若者から「ごみゼロ」の文化を育む (1)

呉 尚浩 教授 (観光・まちづくりコース)

地域共創センターでは、昨年度より防災・環境部会を新たに発足させて、防災面の事業を実施してきました。今年度からは、環境面の活動として「海ごみ問題」解決のための取り組みをスタートします。

その最初の試みが、三川町の中高生ボランティアサークル「来夢来人」、共創センター、NPOパートナーシップオフィス、学生サークルのIVUSA (NPO法人国際ボランティア学生協会) 酒田支部SOLEILやSCOPとの共創活動である「RE:プロジェクト」です。この活動の意義は、第一に、海岸部での海ごみ回収だけではなく、発生抑制の観点から内陸部と連携して実施する試みであることです。6/19 (土) には三川町のパーク赤川 (赤川河川緑地ふれあい広場) での中流域の活動、7/17 (土) には呼びかけ範囲を広げて、三川町民、新庄東高の学生・教員の皆さんも参加しての赤川河口、海岸部でのクリーンアップ作戦を実施することで「陸域のごみ発生—河川—海ごみ問題」の関係を体感してもらいました。第二に、同じく多様なボランティア活動に取り組む、中高生と大学生が互いに刺激しあう良き場となっていることです。5/15 (土) の事前研修会においては、IVUSAの学生が、彼らが行っている国内外における幅広いボランティア活動を紹介したり、アイスブレイキングのゲームを担当し交流を深めました。

もうひとつの試みは、海ごみ環境学習リーダー育成研修です。いままで、東郷小 (三川町)、亀ヶ崎小 (酒田市) から、学生の活動の紹介を通じて児童に向けて、海ごみのことを伝えて欲しいとの依頼を受け、出前授業などを実施してきました。

今後もそのような要請に応えるべく、学生たちが回収活動だけではなく、自分たちよりも若い世代へ伝えることで、庄内ひいては山形全体に“ごみゼロ”の文化を育てていくきっかけにしたいと願っています。そのための学びとして、5/15 (土) には、山形県を中心に海ごみに関する環境学習で活躍する大谷明氏 (NPO法人パートナーシップオフィス) を講師として、「海ごみ問題をどう伝える？」をテーマに第1回の研修会を開催しました。



活動に参加する本学学生と三川町の中高生 (三川町テオトルにて5/15開催の事前学習会にて)

学生、高校生 集まれ！ ネイティブスピーカーと語り合う「カフェ」オープン
Welcome to the English Café!

エドモンド・フェック 講師 (国際教養コース)

2021 Koeki University's
English Café OPEN



Do you want to practice speaking English?
If so, please join the English Café at Koeki University.
Enjoy talking in English with native speakers and other students.

The English Café is an English conversation session for Koeki university students and high school students in Sakata. It is held from 7PM to 8PM on the 2nd Tuesday of every month from April to December. In this brief article I will explain the history of the English Café, the format of the Café and who the participants are.

The initial aim of the English Café was to increase the opportunities for Koeki students to practice speaking English with native speakers.

We then decided to invite high school students from Sakata. Now we have students from Sakata Higashi, Minami and Koryo High School attend as well. Unfortunately, the coronavirus pandemic made it difficult to hold sessions regularly in 2020, but so far this year (2021) we have enjoyed monthly sessions in April, May and June, which about 10 students have

attended each time.

I am glad to say that I am not the only teacher or native speaker at these sessions. From 2020, two American ladies who work as ALTs in Sakata, Cheyenne Weaver from Ohio and Katherine Hayes from New York State, regularly come to the university to help out. In addition, Koda sensei, a retired English teacher who I used to work with at Junior High School, also helps. Thanks to them, the students have the chance to talk to different teachers and speak English in a relaxed and fun atmosphere. I really appreciate all the students and teachers who have attended these sessions and I hope many more students will participate in future.

NB. There is a limit to the number of students who can join each month. Anyone wishing to participate should register each time via the following website: <https://forms.gle/wmDxpeYKc1xvuAQV7>



Scan the QR code! ↑ 日本語訳はこちら! ↑

【要約】 イングリッシュカフェは、公益大生と酒田市内の高校生による英会話交流です。毎月第2火曜日 19時から20時 (4月~12月) に活動しています。ALTのネイティブスピーカーも参加しています。地域の方々とともに、英語を学ぶ機会を盛り上げています♪

【酒田市 地域IT人材等育成業務事業】
スーパームーンの皆既月食観察会

山本 裕樹 准教授 (メディア情報コース)

2021年5月26日は日本全国で皆既月食が見られました。前回に日本で見られた皆既月食は2018年だったので、それから3年ぶりとなります。しかも、スーパームーンという1年のうち月が最も接近して大きく見える満月の日とも重なったので、テレビやインターネットでちょっとした話題になりました。

この日、公益大では酒田市の地域IT人材等育成業務事業の一環として市民に参加を呼びかけて「スーパームーンの皆既月食観察会」を開催しました。新型コロナウイルス対策のために来場者制限を行う一方、Zoom を利用してオンラインで同時中継も行いました。来場参加者 52名、オンライン参加者 21名の合計 73名の方に参加していただきました。18時より中研修室1で皆既月食の原理や色についての解説を行いました。皆既月食は夕日が赤く見えるのと同じ原理で赤銅色に見えること、オゾン層の影響で一部が青っぽく見えるターコイズ・フリンジなどの話をしました。

その後、19時よりけやき広場にて望遠鏡を使って皆既月食を観察しました。予定では 18:45 に半影食の状態が昇ってくるはずなのですが、木が邪魔でしばらく見えず、20時少し前からようやく観測可能な高度となりました。20:09 から皆既食になり、20:18 の食の最大を経て20:28 に皆既食の終了となりました。現地では、望遠鏡に装着したカメラの映像をプロジェクタで映しており、直接望遠鏡をのぞいてスマホのカメラで撮影できた人もいました。

公益大には以前に天文部があり、夏休みに小さな子ども達を呼んで天体観測を行っていたのですが、今は天文部も無くなり、このようなイベントは久々でした。多くの参加者に喜んでいただけたようなので、機会があればこのようなイベントを開催したいと思います。最後に、参加者の皆様、協力していただいたスタッフの皆様に感謝申し上げます。



鳥海山の頂から
世界をめざせ!!

小学5～中学3年生向けのプログラミング講座
「ジュニアドクター鳥海塾」を開講します。

東北公益文科大学は、科学技術振興機構（JST）の令和3年度「ジュニアドクター育成塾」の実施機関に選定されました。ジュニアドクター育成塾は、将来の科学技術イノベーションを牽引する傑出した人材の育成に向けて、高い意欲や突出した能力を持つ小中学生を発掘し、その能力を伸ばさせる体系的な取り組みです。「ジュニアドクター鳥海塾」と名付けられたこの取り組みについては、本学ホームページでご確認できます。さまざまな情報を発信していきますので、ぜひご覧ください。



2021年4月～ ◆ダブルメジャー 始まりました

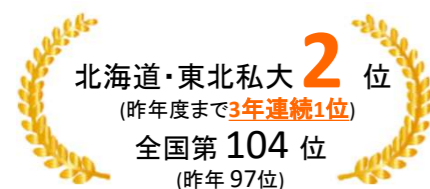
ますます複合化・大規模化するこれからの課題を解決するためには、さまざまな分野の専門知識を持った人々がチームとなって集まり、互いの立場や主張を理解し歩み寄りながらより良い解決方法を探っていくことが今後さらに重要になってきます。

2021年4月からのカリキュラム改革で、従来の1つのコースを軸とした幅広い学びに加え、ダブルメジャーで2つのコースの専門知識を系統立てて学ぶことが可能になりました。

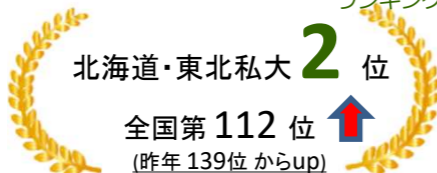


◆THE世界大学ランキング日本版 2021

“国際性” ランキング



“教育充実度” ランキング



“総合” ランキング



編集後記

これまで広報誌の編集に携わってきましたが、今回も魅力ある活動を紹介できたと思います。コロナ禍だからこそできることを見つけて、いろいろなことにチャレンジしていきたいですね。発行まで見届けることはできませんでしたが、天体の表紙が映える第6号はよき思い出になりました。みなさんのことを速くから応援しています。一葉浮萍归大海，人生何处不相逢！（K.T）

広報誌 『公益大ニュース』 第6号 2021.8

〒998-8580 酒田市飯森山三丁目5番地の1
TEL:0234-41-1111

東北公益文科大学
Tohoku University of Community Service and Science

